

身の回りの対象や事象について 意味や価値を生み出す生徒を育成する美術科の授業 ～造形的な視点を基に思考させることを通して～

I 主題設定の理由

今日、世界は人工知能（AI）や、ビッグデータ、ロボティクスなどの先端技術が高度化し、あらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつあり、社会の在り方そのものが、これまでとは非連続と言えるほど劇的に変わる状況が生じつつある。昨日までの常識や価値観が一瞬にして変わってしまうような世の中を私たちは生きている。このような状況を受けて、令和3年に文部科学省より出された『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供達の可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）¹⁾では、STEAM 教育の推進について述べた項目の中で、「AI や IoT などの急速な技術の進展により社会が激しく変化し、多様な課題が生じている今日においては、これまでの文系・理系といった枠にとらわれず、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成が求められている」¹⁾と述べられている。このことから知識や技能を習得するだけでなく、学んだことを活用して社会の中でよりよくするために改善すべき課題を見出したり解決したりすることや、価値を生み出していく力を育成することが必要であると考え。また、三澤一実は「当初 STEAM 教育は、理数系の STEM 教育として始まったが、アートの持つ創造的な思考や感性が、理数教育と融合することで起きるイノベーション^{注1)}の必要性から STEAM となった」²⁾と述べている。このことから、時代の変化を受けた STEAM 教育においても、アートの創造的な思考や感性が価値を生み出していくことを支える重要な役割を担うことが期待されている。

こうした社会の中で、美術科の役割について三橋純子は「美術表現や鑑賞活動は、学校の図画工作や美術の授業科目としてのみ行われているわけではない。むしろ、授業を学びの基礎として、学校を地域のハブ機能として考えられるのではないだろうか」³⁾と述べ、美術の授業の活動が授業内に閉じたものではなく、広い学びの基盤であることを示唆している。さらに、神林恒道は「美術教育でいちばん重要なことは、子どもたちがどうやって、日常の生活の中で美しいものを発見するか、それを見守り手助けすることではなかろうか」⁴⁾と述べていることから、生徒が自分の身の回りの対象や事象に対して、美術科の授業での学びを生かせるようにしていくことが必要であると考え。

また、学習指導要領解説では、「同じものを見てもよさや美しさを感じる人もいれば、そうでない人もいるように、どれだけ多くのよさや美しさが自分の身近な生活の中にあつたとしても、造形的な視点がなければ気付かずに通り過ぎてしまう。そして、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力も十分に育っていかないものである」⁵⁾と示されており、美術科には生徒が対象や事象を造形的な視点^{注2)}を基にして捉え、意味や価値^{注3)}を生み出す力を育む役割があると考え。

前研究シリーズでは、「工夫ポイント」^{注4)}の活用の仕方について理解を深めることができ、それを基に発想し、構想を練りながら、主題^{注5)}を追求する姿が見られた。また、他者と意見交換をしたり、制作過程を振り返る時間を設定したりしたことで、「工夫ポイント」を効果的に活用できる表現方法を考え、より主題を追求することにつながったことが成果として挙げられる。

一方で、その題材の中で「工夫ポイント」を活用することはできていても、別の題材や分野^{注6)}になると活用することが難しくなる生徒の姿が見られた。「工夫ポイント」が「その題材の中の作品で生かせるもの」ということだけでなく、「様々な作品の表現に生かせる知識」であることの意識付けが不十分であり、知識や技能の活用がその題材の範疇で留まっていることが原因として考えられ、身の回りにある対象や事象に対して意味や価値を生み出していくことにも課題が残った。

これらのことから、自分が習得した知識や技能と、他の題材や分野との関連性を認識させることが、習得した知識や技能を別の場面でも活用しようとする意識につながると考える。さらに、総論での「新たな文脈の課題」として、「一般化された知識」を活用させながら、最終鑑賞を行う。身の回りの対象や事象について、実際に造形的な視点を基に思考させることが意味や価値を生み出すために有効であると考え。そこで、本校美術科は研究主題を「身の回りの対象や事象について意味や価値を生み出す生徒を育成する美術科の授業～造形的な視点を基に思考させることを通して～」とし、研究を進めることとした。

Ⅱ 研究の概要

1 美術科が目指す生徒像

身の回りの対象や事象について意味や価値を生み出す生徒

本研究では、生徒にとっての「身の回りの対象や事象」を「日常生活の中で見たり、触れたり、感じたりできる具体的なものでできごと」とする。意味や価値はともに造形的な視点を基にして生み出していくものである。なぜなら、私たちの身の回りにある対象や事象は、形や色彩、材質など、造形の要素が働き、それらが組み合わせることで様々なイメージをつくりだしているためである。

また、美術科は、知識や経験などに基づく個人の感性を働かせながら意味や価値を追求していく学びであると考え。したがって、一人一人にその答えが存在し、その表現の仕方も多様である。

2 育みたい資質・能力

美術科における目指す生徒像に近づけるために、以下のような資質・能力を育む必要があると考える。

造形的な視点を基に、様々な対象や事象について思考する力

「造形的な視点を基に」とは、造形の要素に着目してそれらの働きとイメージを関連付けて捉えることを指す。「様々な」とは、対象や事象の存在する場面が一つの題材の授業だけに留まらず、別の題材や分野から、日常の生活までの広い範囲であることを指す。

この資質・能力を育むため、複数の「工夫ポイント」を組み合わせたとときどのような効果があるか考え、概念同士の関わりとして捉えさせることで、題材を超えて活用できるように思考を整理させる。さらに、「新たな文脈の課題」で「一般化された知識」を別の対象や事象に向けて考えさせることで、授業内で留まらず広い範囲で活用できるものであることを意識付ける。このような段階を経て、概念的思考力が育まれると考える。

3 資質・能力を育むための手立て

総論において示されている「中核となる概念」「一般化された知識」「概念」「事実」について、本校美術科での定義は次の通りとする。また、題材における一例を、後掲資料1にて示す。

項 目	本校美術科の捉え
中核となる概念	造形的な視点
一般化された知識	複数の概念を組み合わせたときの効果を明文化したもの
概念	各題材における「工夫ポイント」
事実	各題材における「工夫ポイント」の効果を具体化したもの

【表1 本校美術科の捉え】

(1) 知識の一般化と活用を促すための場の設定

資質・能力を育むために、まずは「工夫ポイント」について自身で試行錯誤したり、他者の意見に触れたりさせることで、「工夫ポイント」の活用方法のバリエーションに気付かせ、その題材以外での活用にも意識を向けさせることが必要である。よって、学習の流れを「つかむ場」「追求する場」「ふりかえる場」の三つの場で構成し、知識の一般化、「新たな文脈の課題」につなげていく。

「つかむ場」では、題材に関わる知識や技能について習得させる。まず、現題材の「工夫ポイント」を意識できる参考作品を鑑賞させ、「工夫ポイント」の活用の仕方に気付かせる。また、現題材の「工夫ポイント」を試す中で見つけた表現について感じ取ったイメージを記述し、表現の写真^{注7)}とともに学習支援ツールを用いて提出させる。クラスで集約したものを「お試し図鑑」と呼び、他の生徒が試した表現やイメージについて自由に閲覧できるようにする。様々な表現や意見を参考にして、自分の主題に必要な表現の追求に活用させる。表現自体だけではなく、感じ取るイメージも様々なことに気付かせ、表現のバリエーションを広げられるようにする。これらの活動を通して、各「工夫ポイント」に関する知識や技能について習得させ、概念の形成につなげる。

「追求する場」では主題を効果的に表す方法について考えさせる。まず、主題を表すためのアイデアスケッチをさせ、自分の考えをより明確にさせる。次に、アイデアスケッチの中間鑑賞会を行う。主題が「工夫ポイント」を活用して表現されているか、自分ならどのように表現するかなどを意見交換させる。「工夫ポイント」の多面的な活用の仕方や、より効果的な表現方法を手がかりとして、本制作をさせる。また、「制作の記録」として、毎時間の自分の取組をワークシートに記述させたり、写真として作品の経過を記録させたりする（後掲資料2）。自分の工夫や意図を可視化して客観的に捉え、「工夫ポイント」のより効果的な活用の仕方を追求させる。

「ふりかえる場」では、これまでに得た知識の一般化を行う。「一般化された知識」を基に「新たな文脈の課題」に取り組ませる。概念について自分の言葉で記述させたり、「一般化された知識」を活用させたりする活動を通して、概念的思考力を育む。

(2) 表現活動や鑑賞活動を経て得た知識の一般化

表現活動や鑑賞活動の学習を生かして、「工夫ポイント」の活用についてどのような効果があるか各「工夫ポイント」ごとにそれぞれ記述させることで、改めて「工夫ポイント」を概念として捉えさせる。その後、複数の「工夫ポイント」を組み合わせたときの効果について考え、知識の

一般化を促す（後掲資料3）。複数の「工夫ポイント」を組み合わせ、効果について比較したり例外がないか考えたりすることを通して、資質・能力を育む。

(3) 身の回りの対象や事象に目を向けさせる「新たな文脈の課題」の設定

身の回りに「工夫ポイント」が使われている例^{注8)}を提示し、鑑賞させる。その際、「一般化された知識」を用いてワークシート（後掲資料4）に記述させ、どの部分から捉えたのか、「工夫ポイント」を単体で使ったときの効果と比較しながら考えの理由を明確にさせる。「一般化された知識」を別の場面でどのように生かせるか考えさせることで、資質・能力を育む。

なお、資質・能力を育むための手立ての位置付けは右図のようになる（図1）。



【図1 資質・能力を育むための手立ての位置付け】

4 資質・能力が育まれたかの評価について

育みたい資質・能力がどの程度育まれたかについては、ワークシートにおける記述や作品から評価することで、手立ての有効性を検証する。

また、学級全体の変容を捉えるための補助的資料として、抽出生徒を設定し、上記の分析方法に加え、グループ活動での発言などからもねらいに即した姿があるかどうか見取りをすることで検証の一助とする。

5 研究の経緯と課題

研究1年次では、「造形的な見方・考え方を、様々な対象や事象に働かせることができる力」^{注9)}を育むために設定した手立てが有効であるかを検証した。

場の設定について、「つかむ場」では、「工夫ポイント」が活用されている参考作品を鑑賞させることで、どのように「工夫ポイント」を活用するとよいか気付かせることができた。「お試し図鑑」の活動では、様々な「工夫ポイント」の活用について考えるだけでなく、他の生徒の「工夫ポイント」の活用の仕方について知ることができた。また、他の生徒の表現や感じ方について知ることによって、同じ表現でも感じ方が様々であることに気付く様子が見られた。「追求する場」の中間鑑賞会では、「工夫ポイント」の活用の観点から、付箋を用いてアドバイスをし合う中で、自分一人で構想していた内容から、アドバイスを受けてより主題を表すために効果的な表現へ改善しようとする生徒が見られた。「制作の記録」ワークシートの活用については、考えたことを言語化することで自分の考えを客観的に捉え、「工夫ポイント」の活用のためにすべきことをさらに記述することができていた。これらの学習を経て臨んだ「新たな文脈の課題」では、身の回りの「工夫ポイント」が使われている例を提示し鑑賞を行わせた。授業内で得た知識を基にして、日常的に何気なく目にしていたものでも改めて捉え直し、意味や価値について記述する様子が見られた。活動後の生徒の振り返りの記述からも、知識や技能をその題材以外で活用しようという意識をもつことができたことが分かった。

以上のことから、資質・能力を育むことに一定の成果があったといえる。

一方で、「ふりかえる場」で知識の一般化を図る際、得た知識の関わりについて導き出すことができていない生徒が見られた。また、「新たな文脈の課題」において、複数の「工夫ポイント」の効果を別々で記述している生徒が見られた。これらは、複数の「工夫ポイント」を組み合わせることを、生徒に十分に意識させることができなかったからであると考え。複数の「工夫ポイント」について組み合わせで考えられるようにするためには、「工夫ポイント」を単体で使ったときの効果との比較をさせながら少人数や全体で意見を共有して様々な考えを知ること、自身の考えを捉え直すきっかけとなり知識の一般化がしやすくなるのではないかと考えた。

さらに、「新たな文脈の課題」の鑑賞では、「一般化された知識」によって意味や価値の解釈が深まるものを提示し、「一般化された知識」が様々な対象や事象に活用できることを生徒に実感させていく。

6 2年次のねらい

2年次では、題材で学んだ「工夫ポイント」の効果について、知識を一般化する前に改めて確認する場を設ける。少人数や全体で「工夫ポイント」の効果を確認し、それぞれの「工夫ポイント」を概念として捉えてから、複数の「工夫ポイント」を組み合わせで一般化させていく。「新たな文脈の課題」の鑑賞では課題の精選をする。また、「工夫ポイントの活用について記述する」ではなく「一般化された知識を用いて記述する」と問い方を変え、複数の「工夫ポイント」の効果が組み合わさった状態で考えることを意識させる。

手立ての有効性については、引き続きワークシートや作品、授業の様子から見取することで検証していく。

注1) イノベーションとは、同書にて「新たな捉え方や活用法、価値やアイデアなどを創造すること」と述べられている。

注2) 本校美術科では、造形的な視点を「造形や色彩、材質など形を豊かに捉える多様な視点」と定義する。

注3) 本研究で用いる「意味や価値」は、学習指導要領解説に示されている「自分としての意味や価値」を指す。

注4) 本校美術科では、「工夫ポイント」を、造形的な視点の中でも、各題材において意識させ、制作する上で特に手がかりとした要素とする。

注5) 主題とは、作品を通して表現者が強く表したいことである。

注6) ここでの分野とは、学習指導要領解説における表現活動の「絵、彫刻、デザイン、工芸」を指す。

注7) 表現の写真とは、混ぜてつくった色を塗った画用紙や、粘土でつくった形など、生徒が「工夫ポイント」について試してできたものの自体の写真を指す。

注8) 提示するものの一例として、「工夫ポイント」が「配色」「構図」「モダンテクニック」の絵画分野の題材の場合、料理の盛り付けの写真やインテリアの写真などが挙げられる。導入時の鑑賞作品と類似した絵画作品を提示するのではなく、生徒が題材内での鑑賞や制作で触れていない対象や事象を設定することが望ましいと考えている。

注9) 育みたい資質・能力は2年次に再検討し、使う言葉を変更している。

引用文献

- 1) 文部科学省『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供達の可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』、2021年、56ページ
- 2) 三澤一実『美術の授業のつくりかた』武蔵野美術大学出版局、2020年、15ページ

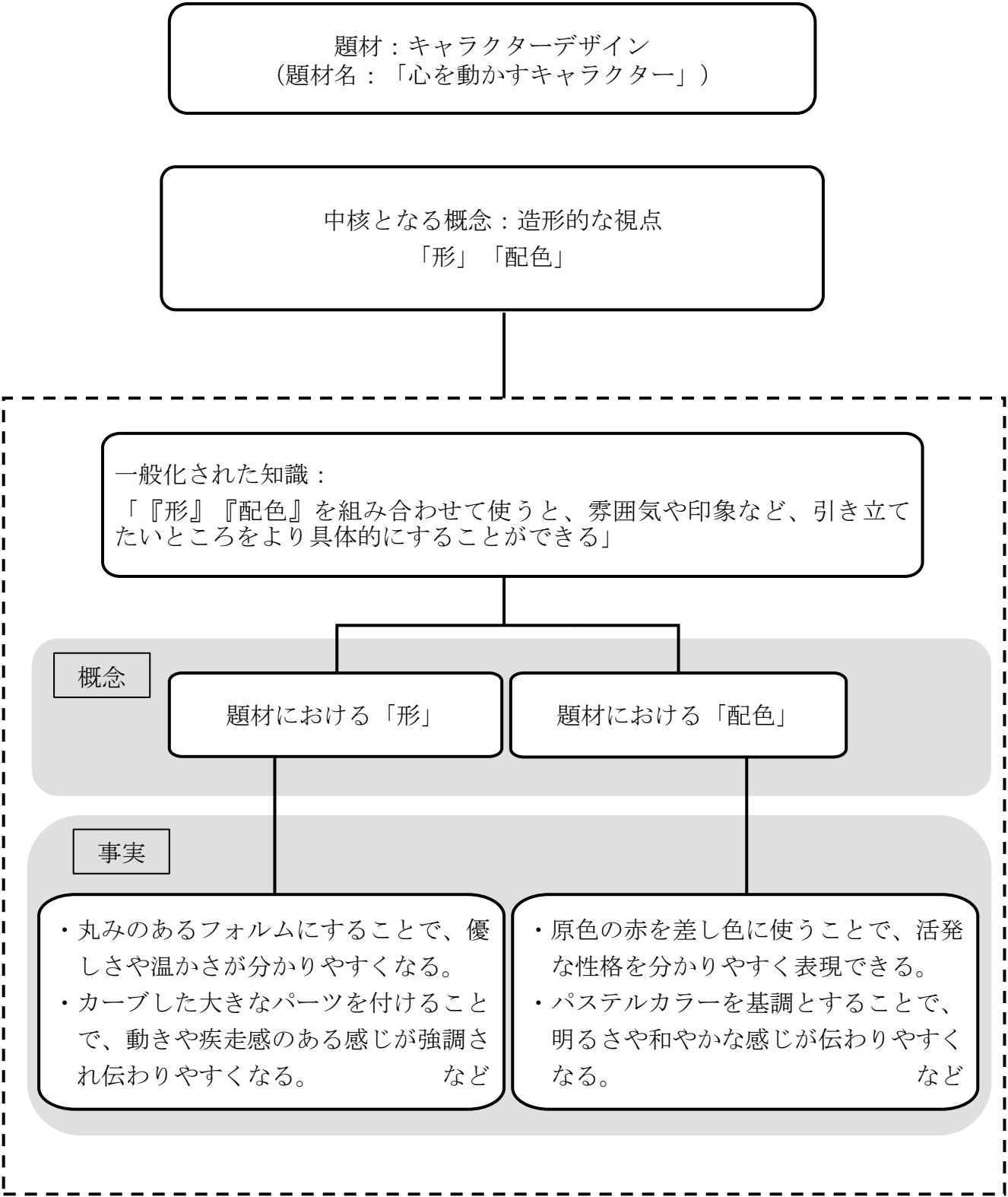
美術科

- 3) 三橋純予「社会へと広がる美術教育」神林恒道・ふじえみつる監修『美術教育ハンドブック』三元社、2018 年、245 ページ
- 4) 神林恒道「美術教育とは何か」神林恒道・ふじえみつる監修『美術教育ハンドブック』三元社、2018 年、18 ページ
- 5) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 美術編』日本文教出版、2018 年、10、11 ページ

参考文献

- 大坪圭輔『求められる美術教育』武蔵野美術大学出版局、2020 年
- 永守基樹『美術教育学の現在から』学術研究出版、2018 年

キャラクターデザインの題材における知識の階層図



後掲資料 2

制作の記録 態

主題

・見返したときに、視覚的に分かりやすい形で記録しておくといよい ・欠席回数（ ）回

日付	アイデアスケッチ	月	日	月	日	月	日	
写真								
本時の 振り返り						作品について ・工夫したところ ・考えたこと など		
次時の 見通し								
評価		評価基準			評価物		評価	総合評価
知識・技能	「形」「配色」の効果について考え、記述している。			ワークシート①		A ・ B+ ・ B ・ B- ・ C		A ・ B ・ C
	「形」「配色」の活用について、配色を確かめながらアイデアスケッチに表している。			ワークシート②		A ・ B+ ・ B ・ B- ・ C		
	作品について、学んだことや考えたことを適切に表現している。			作品		A ・ B+ ・ B ・ B- ・ C		
思考・判断・表現	「形」「配色」の観点で周りの作品の表現を捉え、自分なりの価値や改善点などを記述している。			中間鑑賞を通して（ロイロ）		A ・ B+ ・ B ・ B- ・ C		A ・ B ・ C
	「形」「配色」の効果的な使い方を、アイデアスケッチの際考えて記述している。			ワークシート②		A ・ B+ ・ B ・ B- ・ C		
	「形」「配色」の効果について考えて鑑賞し、意味や価値を記述している。			ワークシート③		A ・ B+ ・ B ・ B- ・ C		
主体的に学習に取り組む 態度	毎時の制作について振り返り、次時以降の制作についても見通しを立てている。			制作の記録、ワークシート④		A ・ B+ ・ B ・ B- ・ C		A ・ B ・ C
	題材を通して、「形」「配色」の効果について考えることができている。			授業全体の様子		A ・ B+ ・ B ・ B- ・ C		

「心を動かすキャラクター」③（ふりかえる場）

月 日 2年 組 番・氏名（ ）

「形」「配色」の効果とは、何だろう？

1 自分の表現をふりかえる（制作の記録）

- ①作品の写真を撮る。
- ②「作品について」を記入する。

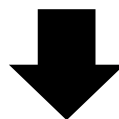
2 周りの人の作品を鑑賞する 思

- ・使われている「形」「配色」について、どの部分から、どんなことを考えた・感じたかを具体的に書こう。

作者	どの部分から	考えた・感じたこと

3 知識を一般化する

「形」を活用すると できること	「配色」を活用すると できること



★「形」「配色」を組み合わせると、

--

を効果的に表現することができる。

「心を動かすキャラクター」④（ふりかえる場）

月 日 2年 組 番・氏名（ ）

「形」「配色」を組み合わせたときの効果とは、何だろう？

（前回は思い出して）

★「形」「配色」を組み合わせると、

--

を効果的に表現することができる。

1 新たな文脈の課題に取り組む

- ・一般化された知識を用いて鑑賞する。
- ・2つのデザインを比較して書く。例：「左は～だが、右は…」「左（右）の方が、…」
- ・どの部分からそう考えたのか、理由を明確にして書く。

	考えたこと
個人で	



グループで意見交換・全体での共有を経て…
（メモ）

- ・個人で考えたことを基に、必要に応じて付け足し・修正して、改めて文章化する。

--

2 題材のまとめ 態

- ・「形」「配色」について、題材を通して考えたこと／今後生かせそうなことを書く。
